

『ブラック・ライヴズ・マターから学ぶ』合評会 趣旨説明

Joint Book Review, *Learning from Black Lives Matter: Interdisciplinary Studies in the Perspective of Globalized World: Introduction*

山内 由理子
YAMANOUCHI Yuriko

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

キーワード

ブラック・ライヴズ・マター 合評会 東京外国語大学

Keywords

Black Lives Matter; Joint Book Review; Tokyo University of Foreign Studies

Quadrante, No.25 (2023), pp.9–10.

皆様、本日はお忙しいところ、『ブラック・ライヴズ・マターから学ぶ』の合評会にお越しいただきありがとうございます。

繰り返すまでもないことですが、ブラック・ライヴズ・マター運動とは、2012年2月26日、アメリカ合衆国フロリダ州のサンフォードで、17歳の黒人少年トレイヴン・マーティンが白人自警団員に殺害され、翌年7月その自警団員に無罪判決が下されたことをきっかけとします。これを機に“Black Lives Matter”を掲げた運動が、アリシア・ガザ、パトリス・カーン＝カラズ、オパール・トメティの三人の女性によって立ち上げられました。

2020年5月25日、ミネソタ州ミネアポリスで46歳の黒人男性ジョージ・フロイドが軽微な犯罪容疑で手錠をかけられ、警察官によって地面に倒されて頸部を膝で押さえつけられ、「息ができない」と何度も訴えたにもかかわらず最終的には死に至らしめられた事件を機に、このブラック・ライヴズ・マター運動はアメリカ合衆国を越えて世界に拡散し、世界各地でBLMを掲げてデモが行われました。

この運動が世界でこれだけ大きな動きとなったのは、アメリカ合衆国における黒人への暴力や差別が世界の人々に衝撃を与えたためのみならず、近年世界各地で起こっている植民地主義など過去の不正への見直しの動きなどと共鳴したと考えることができます。

本書『ブラック・ライヴズ・マターから学ぶ』は、2020年10月から2021年7月にかけて、東京外国語大学多文化共生研究創生ワーキンググループの主催で開催された9回（＋2回のスピンオフ）の連続セミナー「Black Lives Matter 運動から学ぶこと——多文化共生、サステイナビリティについて考えるために」を背景としています。セミナーに登壇された先生方がセミナーの内容に基づいた論考を寄せ、2022年3月に出版されました。

ブラック・ライヴズ・マター運動とは日本にとっても決して「他人事」ではありません。東京外国語大学においても2020年2月に本学学生が行ったアンケートで「人種」をめぐる設問において人を傷つけるような言葉遣いを使ってしまったという事件がありました。本学にお



ける連続セミナーはこのような状況を背景に、BLM 運動について考え、学んでいこうという動きに拠るものでした。BLM 運動が告発した問題は現在だけではなく、今日にいたるまでの植民地主義の歴史など差別や不平等・不公正の解消されずに来た蓄積であり、それが目に見える差別の問題だけではなく、我々の日常の中にも浸透する表象や世界観にも多岐にわたり根強く影響してきたことを示しています。そのような性質から、政治経済、歴史、音楽、思想、教育、芸術など多面的な分野、アメリカ合衆国のみならず、グローバルな地域に視点を広げて BLM 運動にアプローチしたのがこの連続セミナーであり、それに基づき新たに論考としてまとめられた本書であります。

今日 BLM 運動を毎日のようにメディアで見ることはありませんでしたが、この運動が提起した問題は日々我々の中に様々な形で残り続けており、我々が取り組み続けなくてはならないものです。今回は、そのような観点を含んで本書を振り返るということで、本学名誉教授の中野敏男先生と本学大学院生（博士後期課程）の小美濃彰氏のお二人の発表者にお越しいただきました。中野先生と小美濃氏にはそれぞれのご研究を背景とした観点から書評の発表をお願いしております。お二人の発表の後、本書の編集者である中山智香子先生と武内進一先生からのリプライ、本書の出版に尽力された東京外国語大学の小田原滯氏よりのコメントをいただくことになっております。皆様、よろしくお願いいたします。

＊ ＊ ＊

（謝辞：この合評会にご協力くださった発表者、コメンテーターの方々、この企画と運営にご尽力くださった香坂様、金雪梅様、山崎様の海外事情研究所のスタッフの方々にお礼を申し上げ

げます。）